

西海ブロック水産業情報

NO. 80 (平成25年1月～3月)

増養殖情報

山口県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県
<p>記載なし</p>	<p>【筑前海】フトモズク養殖：現在、育成中。 【有明海】ノリ養殖 12月25～27日に冷凍網の出庫が行われ、1月2日から摘採が開始された。1月は順調に生産が行われたが、2月4日から色落ちが発生した。この色落ちは2月18日に拡大し、同時にあかぐされ病も酷くなったため、2月下旬頃から適宜網の撤去作業が開始された。なお、色落ちは3月29日まで継続した(54日間)。また、一部で三期作(冷凍網の張り替え)が3月10日頃から開始され、色落ちが継続している中、1～2回の摘採が行われた。第10回共販までの生産枚数は13.8億枚(過去5年比100%)、生産金額は131.7億円(過去5年比99%)、平均単価は9.54円/枚(過去5年比-0.09円/枚)であった。 【豊前海】 豊前海区では宮城県産のカキ種苗を用いて養殖が行っているが、24年度は震災後初めて出荷されたカキ種苗による養殖となった。5月中旬から7月下旬にかけて、クロダイによるカキの食害が発生し、一部の漁場では被害がひどかったが、秋期の減耗が例年より少なく、また、身入りも良かったため、海区全体としては例年の約7割約1000トンの生産量になる見込み。</p>	<p>【玄海】種苗生産 ・カサゴ：4月中旬～5月中旬頃に中間育成用15万尾(45mmサイズ)配付予定。 ・アカウニ：放流用約60万個(8～12mmサイズ)、養殖用約10万個(3～5.8～12mmサイズ)配布中。 【有明】研究の動向「水産資源関係」 ・タイラギ・サルボウ調査、漁獲物動向調査(市場調査)を実施。 【水産海洋・漁場保全関係】 ・浅海定額調査、漁場環境モニタリング調査(底質、マクロベントス)、サルボウ適正生息環境調査(水質)、貝毒分析(カキ) 【水産増養殖関係】 ・放流アゲマキ追跡調査、アサリ・サルボウ・ウミタケ生息量調査 ・養殖マガキの付着密度比較試験、垂下水深比較試験および長期抑制試験 ・有明海産カキ類の採苗・養殖試験 ・沖合域におけるモガイ散布耕耘試験の追跡調査 【その他】 ・有明水産振興センターのホームページに漁況情報として、赤潮情報や海況関連情報の公開を継続中。 【水産業の動向】「水産資源関係」 ・タイラギ 平成24年10月中旬に実施した55地点での生息状況調査の結果、漁獲対象となる成貝が確認できなかったことから、11月に行われた福岡・佐賀両県有明海潜水器漁業者協議会において、17年度以来7年ぶりの休漁のため漁獲されていない。 ・サルボウ 平成25年3月に実施した生息状況調査を基に漁獲量を推定すると、昨年度並の3,300トと推定された。なお、直近5年分のサルボウの漁獲量は、平成20年が3,019ト、21年が2,258ト、22年が5,298ト、聞き取りによる推定値で、平成23年が2,000ト、24年が3,500トであった。 【水産海洋・漁場保全関係】 ・水温は、1月は平年よりやや低め、2月は平年並み、3月は平年よりやや高めで変動した。 ・比重は、1、2月は平年よりやや低め、3月は平年よりかなり低めで変動した。 【水産増養殖関係】 ・マガキ養殖 平成24年11月8日の収量調査では、約70トの出荷販売が見込めたものの、小サイズの売れ行き不振等があり、約5ト(うち、共販1.2ト)に留まった。小サイズの販売不振は、鹿島市地先等のスミノエガキの成育が良かったことから、市場に多く流通したことも要因のひとつと考えられた。なお、スミノエガキは20数年ぶりに豊漁とのことであった。 ・ノリ養殖 採苗が昨年よりも3日遅い10月16日から開始され、芽付きが厚付き傾向ではあるものの、順調なスタートとなった。その後、低水温傾向であることからアカガサレ病の被害は少なく、品質、生産量ともに良好で、秋芽網期は東中部では12月20日まで、西南部では12月30日まで生産された。秋芽網期の生産状況は、生産枚数6.7億枚(前年比191%)、生産金額78.8億円(前年比218%)となった。冷凍網期は、東中部地区が12月24日、西南部地区が1月8日から開始され、冷凍戻りも良く低水温ながら順調に生長した。 海況は5年連続で発生していたアステリオネラ赤潮が1月7日に発生したが、降雨等による河川水からの栄養塩の供給が多く、流速が遅い一部の漁場を除き、栄養塩が2月下旬まで高めで推移した。そのため、色落ち被害は一部の漁場に限られ、軽微であった。このような中、冷凍網期の生産状況は生産枚数14.7億枚(前年比99.3%)、生産金額132.3億円(前年比83.8%)となった。また、平成24年度漁期の総生産枚数は、21.4億枚(前年比116.9%)、生産金額は211.1億円(前年比108.8%)と豊作の年となった。</p>	<p>○養殖魚類の育種技術開発研究事業 【ホシガレイ】 偽雄化処理魚の後代検定魚を中間育成中。 【トラフグ】 代理親魚技術によりトラフグ配偶子を生産させたクサフグから採卵中。また、高成長、早熟等の優良雄親魚由来の種苗および天然雄由来の種苗(雌は全て同腹卵)を同一飼育条件下で飼育し、成長および成熟調査を実施した結果、各試験区で精巢の重量に明確な差異が認められたことから、早熟は雄に強く影響をうけることを明らかにした。 ○良質な種苗の生産技術開発研究事業 【カワハギ】 早期採卵を実施。現在種苗生産中 ○クロマグロの種苗生産に向けた飼養技術の高度化(プロジェクト研究) 【クロマグロ】 シロギス幼魚・親魚の継続飼育中。 ○標識放流 ・ヒラメ(全長6、8、10cm、各30千尾、有明海) ・オニオコゼ(全長8、9cm、各18千尾、有明海) ○放流魚追跡調査 ・トラフグ、ホシガレイ、ヒラメ、オニオコゼ他について追跡調査を実施 ○飼育水循環型陸上養殖システムについて 本年2月に上記システムの設備が完成し、2月4日よりクエを用いた飼育試験を開始。設備の概要は以下のとおり ・試験区1: 20トンFRP 電気分解浄化・地中熱による温度調節 ・試験区2: 20トンFRP 電気分解浄化・ボイラーによる温度調節 ・試験区3: 20トンコンクリート 生物ろ過・ボイラーによる温度調節 現在、浄化能力の評価やコスト比較のデータを集積中。</p>	<p>○カンパチの低水温による生理障害(現場海水12～13℃) ○その他魚類及び甲殻類でも低水温による影響があると判断される事例が数件発生</p>

鹿児島県	宮崎県	大分県	沖縄県
<p>・モクスガニ種苗生産：2月15～20日 C1稚ガニ200千尾を生産 ・ヤコウガイ種苗生産：約13,000個(26mm)を奄美大島、喜界島、与論島へ放流</p>	<p>・H22年度産(H22.8.23産)人工種苗イワガキを使用し、延岡市浦城湾内において河川水流入に伴う淡水化による阻害生物(ヒラムシ等)影響軽減や成長、生残への影響を調査するため、「特大区」、「大区」、「中区」の3区について、垂下水深の違い(浅水深垂下:1.3m深水深垂下:2.3m)による比較試験を行っている。 試験期間中、すべての試験区で阻害生物の影響と思われるへい死は確認されず、淡水化によるヒラムシ影響軽減効果は不明である。殻高成長率は、各区とも深水深区の方が良い傾向である。生残率は、特大では差がなく良好、大、中は深水深の方が生残率が良い傾向である。また、大きな差はないが、感覚的に浅水深の方が藻類の付着が多い傾向である。現在のところ、1.3m程度の浅水深垂下のメリットは感じられず、同湾内環境で2m以下の水深での養殖が適すと考えられる。(H24.7.9～H25.3現在)</p>	<p>記載なし</p>	<p>記載なし</p>